

日本語教師のカルチャー・ステレオタイプに 対する意識について

— アンケート調査の結果から —

大 浜 るい子

(2002年9月30日受理)

Über das Ergebnis von Umfragen bei Japanischlehrer (inn)en/Student(inn)en
im Bezug auf kulturelle Stereotypen über ausländische Student(inn)en.

Ruiko Ohama

Im vorliegenden Aufsatz wird über das Ergebnis von Umfragen bei japanisch-lehrer(inn)en/Student(inn)en im Bezug auf Stereotypen über ausländische Student(inn)en berichtet. Es werden folgende Punkte klar gemacht.

- (1) Die meisten Lehrer(inn)en/Student(inn)en meinen, daß Stereotypen gefährlich sind und so weit wie möglich abgebaut werden sollen.
- (2) Die meisten Lehrer(inn)en/Student(inn)en haben im allgemeinen über Ausländer(inne)n positive Stereotypen, und über Japaner(inne)n negative Stereotypen.
- (3) Die meisten Lehrer(inn)en/Student(inn)en haben über Fremde, mit denen sie oft Kontakt haben (aus China, USA und Korea), etwas mehr negative Stereotypen, als über Fremde, mit denen sie nicht so oft Kontakt haben (aus Südamerika und Afrika).
- (4) Wenn man längere Karriere als Lehrer(in) für Japanisch als Fremdsprache hat, neigt man dazu mehr negative Stereotypen und weniger Sehnsucht nach Ausland und Ausländern zu haben.
- (5) Trotzdem bleibt noch immer der Wunsch mit Ausländer(inn)en Kontakt knüpfen zu wollen.

Key word : Kulturelle Stereotypen, Umfragen, Karriere als Lehrer(in) Für JaF, Geburtsort von Student(inn)en

キーワード：カルチャー・ステレオタイプ，意識調査，日本語教授経験，留学生の出身地

0. はじめに

日本語教育に携わるということは、学習者に一方的に日本語の知識を伝えるだけではなく、常に学習者との相互的な異文化間コミュニケーションを実行することが要求される。コミュニケーションにはどんな場合でも、ある種の異文化性が関わっていると考えることも可能であるが、日本語教師と留学生の間でのコミュニケーションほど、それが大きく関わるものもないだろう。私たちは、特に異なる文化に属する人をステレオ

タイプ化して整理してしまいがちである。自分にとってなじみのないものや理解が容易でないものを、そのままの形で保持することは耐え難く、早く理解可能なものとして処理してしまいたいと思うからである。その時、手近なステレオタイプを利用するのが手取り早い。しかし、それはコミュニケーションというよりは、むしろコミュニケーションを拒否するものになってしまうと言わねばならない。その時々の一限りのやりとりが作り出す、個別性、唯一性、新奇性を見ることなく、既存の分類枠へ放り込み、そのまま打ち捨

てしてしまうからである。その意味で、望まれる異文化間のコミュニケーションにおいては、このカルチャー・ステレオタイプに対して、常に慎重かつ反省的でなければならぬだろう。

本稿は、日本語教師、あるいは日本語教育を専攻する学生が、カルチャー・ステレオタイプに対してどのような意識をもっているかということについて調査したものを報告するものである。

1. アンケート資料の概要

本調査は、日本語教師や日本語教育を専攻する学生が、カルチャー・ステレオタイプに対してどのような意識をもっているかを明らかにすることを目的として、アンケート形式によって行われた。被調査者は広島、岡山、愛媛、京都、大分の各府県に在住の日本語教師ならびに日本語教育を専攻する大学生、大学院生、計117名で、アンケートの回収率は77.8% (91名)であった。本調査は知人を介しての調査であり、また調査後のフォローアップインタビューのため記名式であった。それらが、回答内容に少なからず影響を与えたことは否めない。それらを考慮して、考察しなければならないだろう。調査は2002年5月から6月にかけて実施された。本稿で取りあげるのは、その内の留学生に対するカルチャー・ステレオタイプの部分である。

なお、調査に先立ち、カルチャー・ステレオタイプについては、次のような解説が提示された。

カテゴリーが細分化されず、固定的にとらえられ、新しい経験に遭遇しても修正されにくいとき、このカテゴリーと結びついている所信をステレオタイプと呼ぶ。そして、ある文化的集団の属性を固定的にとらえ、新しい真実に遭遇しても修正されにくい、膠着化したカテゴリーと結びついている所信をカルチャー・ステレオタイプと呼ぶ。

回答者91名の日本語教授経験は以下の通りであった。経験の長さにより3グループに分けた。

短期経験者25名	経験なし……………12名
	半年以下……………5名
	半年以上1年未満……………8名
中期経験者25名	1年以上2年未満……………8名
	2年以上3年未満……………6名
	3年以上4年未満……………11名
長期経験者41名	4年以上5年未満……………6名
	5年以上……………35名

2. カルチャー・ステレオタイプに対する全体的な意識傾向

回答者たちは、カルチャー・ステレオタイプに対してどのような意識をもっているか。アンケートでは、以下の(1)から(4)の内では正しいと思うものに○をつけるよう指示された。(5)から(7)は、(4)を選択した場合のみ回答する質問項目である。結果は以下の通りであり、回答者たちは、「カルチャー・ステレオタイプは危険である」と考え、「低減させる必要がある」「努力すれば低減できる」と考えているということが出来る。

- (1) カルチャー・ステレオタイプは有益である……………3人
- (2) カルチャー・ステレオタイプは危険である……………40人
- (3) カルチャー・ステレオタイプを低減させる必要はない……………12人
- (4) カルチャー・ステレオタイプを低減させる必要がある……………48人
- (5) カルチャー・ステレオタイプは努力しても低減できない……………0人
- (6) カルチャー・ステレオタイプは努力すれば低減できる……………40人
- (7) わからない……………7人

但し、最も多く選択された項目でも91人中48人(52.7%)で、概してこれらの質問項目の回答率は低かった。さらに最初の2つのペアは2者択一なものとして想定されていたにもかかわらず、(1)と(2)を、あるいは(3)と(4)を同時に選択した回答者も、わずかながらいた。これらを考え合わせると、カルチャー・ステレオタイプは簡単に善し悪しの判断ができない、難しい問題であることが見てとれる。

このような事情の中で、このアンケートに答えることは、場合によっては自分がカルチャー・ステレオタイプをもっていることを認めることになったり、あるいは、カルチャー・ステレオタイプをもつことを仕方のないことと容認することになる可能性があるという意味で、とまどいや抵抗感があつた人も少なくないのではないと思われる。中には「ステレオタイプをもたないようにしていますから、思いつきません」「自分のステレオタイプをこういう調査の形で表現することには抵抗を感じるので、書けません」と記載されたものもあつた。また、以下でも見るが、ステレオタイプとして記載された内容が、概して肯定的な記述が多かつたのも、このような意識の現れだろうと思われる。

カルチャー・ステレオタイプの問題は、多くの場合、肯定的側面よりはむしろ否定的な側面を誇張し固定化した場合に、より表面化されやすく、また重大なものになりやすい。その意味では、この調査の回答は、意識的に否定的な記述が避けられたという印象があるが、反対にそれが、回答者達の「カルチャー・ステレオタイプは危険であり、低減させる必要がある」という思いを表していると思われる。

日本語教授経験の長短による違いは表1に示したとおりである。差はほとんどない。但し、わずかではあるが、短期経験者グループに、カルチャー・ステレオタイプが有益であると考える人が多く、それに連動して「低減する必要あり」「低減できる」と回答した人が少ない。短期経験者には、いまだカルチャー・ステレオタイプの問題性に直面していない人があるのかもしれない(図1参照)。

表1. 日本語教授経験の長短から見たカルチャー・ステレオタイプに対する意識の比較

回答者グループ 質問項目	短期経験者 25名	中期経験者 25名	長期経験者 40名	合計
(1) 有益	2	0	1 (0.5)	3
(2) 危険	10	11	19 (11.9)	40
(3) 低減の必要なし	4	3	5 (3.1)	12
(4) 低減の必要あり	11	14	23 (14.4)	48
(5) 低減できない	0	0	0 (0.0)	0
(6) 低減できる	7	12	21 (13.1)	40
(7) わからない	3	2	2 (1.3)	7
合計	37	42	71 (44.4)	150

(1) 内は25名で換算した数字

3. 肯定的カルチャー・ステレオタイプと否定的カルチャー・ステレオタイプ

では次に、カルチャー・ステレオタイプとして、実

際どのようなものがあがったかを見ていこう。ここでは、調査の中から、「日本人」と「留学生(中国系、英語圏、韓国系、南米系、アフリカ系)」に対する記述部分を取りあげる。この質問では、回答者たちは以下のように自由記述をしながら文を完成させることが求められた。

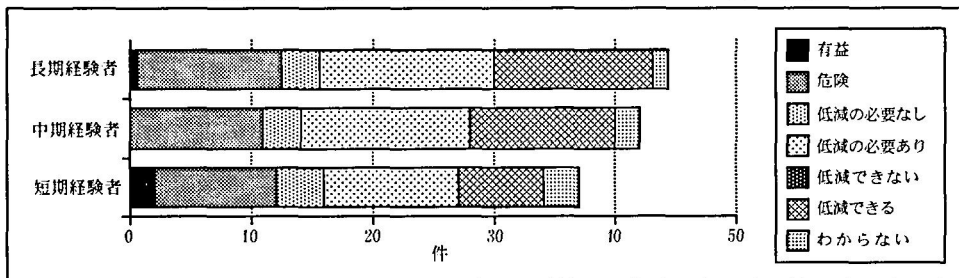
- 日本人は _____ である。
 中国系留学生は _____ である。
 英語圏の留学生は _____ である。
 韓国系留学生は _____ である。
 南米系留学生は _____ である。
 アフリカ系留学生は _____ である。

日本語教師たちは、自分を含めた日本人自身と、日々接している留学生たちに対してどのようなカルチャー・ステレオタイプをもっているのだろうか。個々の記述内容は、実にバラエティに富んでいた。ここでは、それを肯定的評価と否定的評価に分類したものを比較しながら考察していく。

肯定的評価と否定的評価の分類は、以下の手順によって行った。分類は筆者と2人の日本人学生の3名で行った。3名がまず個別で分類し、それを照らし合わせた。多くは同じ判断であったが、異なる場合には再度話し合い、いずれかに分類した。どうしても分類できないものは、「その他」とした。肯定的評価、否定的評価、その他は以下のような特徴をもっていた。

- (1) 肯定的評価：短く単語で表現されやすい。勤勉、真面目、親切、繊細、謙虚、清潔、器用、協調的、奥ゆかしい、おとなしい、など。
- (2) 否定的評価：長く、句や文で表現されやすい。自己表現が下手、情に流されやすい、言うことと考えていることが違う、知らない人には無礼、人生の楽しみ方を知らない、お金のことばかり考えている、など。

図1. 日本語教授経験の長短から見たカルチャー・ステレオタイプに対する意識の比較



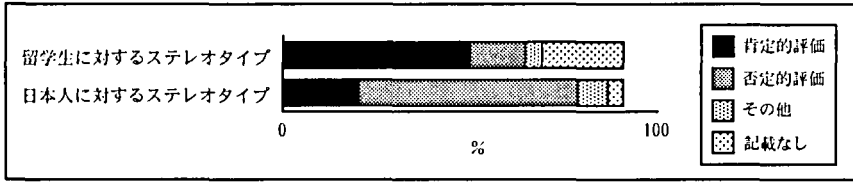


図2. 日本人と留学生へのステレオタイプの比較

なお、否定的表現には、さらに以下の特徴が重なっている場合が多い。

(2-1) 否定的な意味の文字（閉，消，下，苦，無，非，不，など）を含む語：閉鎖的，消極的，自己表現が下手，非個性的，不器用，など。

(2-2) 否定的な意味をもつ語尾（～ない，～にくい，～すぎる，だけ，ばかり，など）を含む語：ものを言わない，自分の意見をもっていない，よそ者になじみにくい，働きすぎる，自分の主張だけは言う，お金のことばかり考えている，など。

(3) その他：肯定・否定の判断ができなかったもの。金持ち，婉曲的な断りを望みやすい，外国人から話しかけられると困る，一人っ子，みんなが集まってよくパーティをしていそう，みんな自転車に乗れる，見た目がよく似ている，漢字が分かる，など。

これらの基準によって分類したところ，以下の結果を得た。

日本人に対するステレオタイプ (91人分91件)

肯定的評価	20 件
否定的評価	59 件
その他	8 件
記載なし	4 件

留学生に対するステレオタイプ

(91人分×5系=455件)

肯定的評価	249 件
否定的評価	75 件
その他	23 件
記載なし	108 件

これを見ると、回答者たちは、概して日本人自身に対しては否定的な評価のステレオタイプを、そして留学生に対しては肯定的な評価のステレオタイプをもっていることがわかる（図2参照）。後者に関しては、先に見たように、カルチャー・ステレオタイプをもたないようにする姿勢と関係があるように思われる。前者に関しては日本の文化を特徴づける「自らを低める傾向」の現れかとも思われるが、むしろ、常日頃頻繁に接触する身近な人間に対しては、概して否定的側面を見てしまいがちであることの現れだろう。

これは、日本語教授経験の長短による差からも、裏付けられるだろう。図3が示すとおり、留学生に否定的評価のステレオタイプをもちやすいのは、短期、中期経験者よりは長期経験者であり、接触が増えると否定的評価が増えるという関係が見てとれる。

4. 留学生の出身地とカルチャー・ステレオタイプ

ところで、上で見た留学生に対する肯定的、否定的評価は、留学生の出身地によって違いがあるのだろうか。表2は、留学生の出身地別にそれを整理したものである。

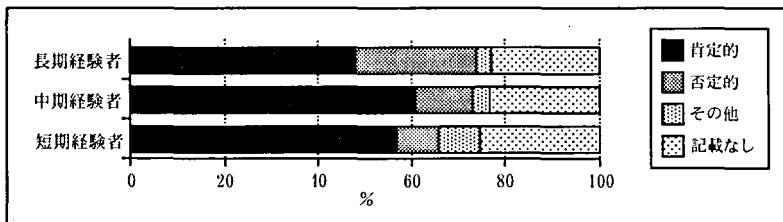


図3. 日本語教授経験の長短から見たステレオタイプの比較

表2. 留学生の出身地別に見たステレオタイプの肯定的評価と否定的評価の比較 (件数)

ステレオタイプ 出身地	肯定的 評価	否定的 評価	その他	記載 なし
中国系留学生	45	26	7	13
英語圏留学生	42	25	6	18
韓国系留学生	54	18	3	16
南米系留学生	57	6	2	26
アフリカ系留学生	47	4	5	35
合計	245	79	23	108

これを見ると、中国系、英語圏、韓国系の留学生と、南米系、アフリカ系留学生の間に線を引くことができる(図4参照)。中国系、英語圏、韓国系の留学生には、否定的評価がかなりあるが、南米系、アフリカ系留学生には否定的評価はごくわずかしか見られない。これを顔面通りに受けとるべきかどうか、迷うところである。特に南米系、アフリカ系では、「記載なし」の割合が多い。これらの系の留学生については、「よく分かりません」「知りません」「見たことがない」などのコメントがあり、それ故の「記載なし」である可能性を考えると、あまり接触したことのない留学生に否定的な評価のステレオタイプをもつことはなく、むしろ、常日頃接触することの多い留学生に対して否定的な評価をする傾向があるということになる。

日本語の教授経験という視点から見れば、図5-1~5-3が示すように、教授経験が長くなるにつれ否定的な評価のステレオタイプが多くなるのは、中国系、英語圏、そして韓国系の留学生に対してであることが分かる。南米系とアフリカ系の留学生に対する評価に変化は見られない。先にも述べたが、ここでも接触の多い留学生に対しては否定的評価が増え、しかも接触期間が長くなるほど否定的評価をする人の数も増えることが見てとれる。

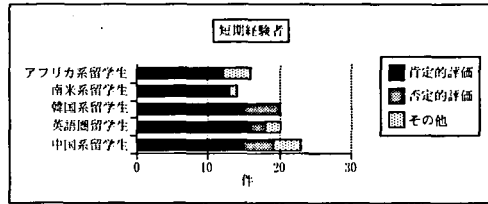


図5-1

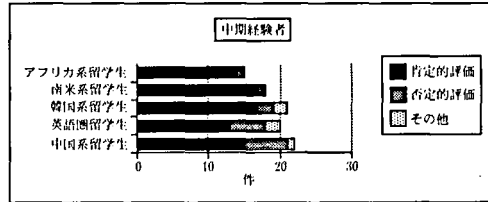


図5-2

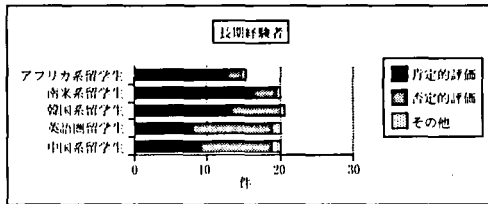


図5-3

図5-1~5-3. 日本語教授経験の長短による留学生の出身地別ステレオタイプの肯定的評価と否定的評価の比較

カルチャー・ステレオタイプについての意識という点では、教授経験の長短による違いはほとんど見られず、どのグループも一様に、カルチャー・ステレオタイプを危険なものに見なし、低減する努力の必要性を訴えていた。にもかかわらず、教授経験が長くなると、実際には否定的評価のステレオタイプをもちやすいという結果が得られた。接触の頻度が高くなるほど否定的な側面に敏感になること自体は避けられないことかもしれないが、それが異文化間のコミュニケーションを不幸なものにしてしまうとすれば、問題である。こ

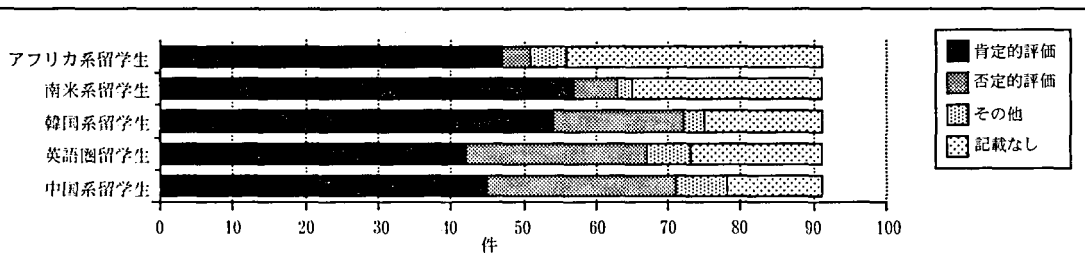


図4. 留学生の出身地別ステレオタイプの比較

ここで得られた結果は、カルチャー・ステレオタイプを低減するためのトレーニングは、教授経験がある程度長くなった段階でこそ、必要だということを示唆していると言える。

5. パーソナリティについての回答結果

今回のアンケートでは、最後に「あなたはどんなタイプの方ですか?」という問いかけをしている。日本語教師達は、自分たちをどんなタイプであると考えているのだろうか。問いかけでは以下の6点があげられ、適当なものに○をつけるよう指示されている。○をつけた回答者数とともに示す。

- (1) 世代や国籍などに関係なく、いろいろな背景の人と接することに意欲的である
以下「意欲」と略……………61人
- (2) 外国にあこがれをもっている
「あこがれ」……………24人
- (3) 外国人に抵抗感や違和感がある
「違和感」……………5人
- (4) 人の意見に影響されやすい
「影響」……………20人
- (5) 将来外国で仕事がしたい
「外国」……………33人
- (6) 外国人と関わる機会の多い仕事につきたい
「外国人」……………45人

ここから、回答者たちは、外国人への抵抗感や違和感がなく、かれらとの接触に意欲的であり(67.0%)、外国人と関わる仕事を望んでいる(49.5%)ことが分かる。これらの点に比べて、「外国人にあこがれをもっている」(26.4%)や「将来外国で仕事がしたい」(36.3%)という割合が少し減るのは、実際的な経験から来る現実に応じた回答なのかもしれない。

図6は、日本語の教授経験の長短とそれぞれの項目を選択した割合との関係を示したものであるが、第一に目につくのは、教授経験が長くなると、これらの項

目の選択数が減っていくことである。それは主に外国人に対するあこがれと外国人と接する仕事につきたいという願望の減少によって引き起こされている。現実を知っていく過程で生じる、考えられる変化である。先に留学生へのステレオタイプのところで見たのと同様の傾向である。しかし、そのような変化の中で「いろいろな背景の人と接することに意欲的である」という項目だけが、変化せず、一定量に保たれていることは、異文化間コミュニケーションの現場にいる日本語教師として、大変望ましい結果である。

6. まとめ

以上、見てきたことをまとめると以下のようになる。

- (1) 回答者たちは、カルチャー・ステレオタイプに対して、危険であり、低減する必要があり、努力すれば低減できると考えている。
- (2) 回答者たちは、日本人自身に対しては否定的な評価のステレオタイプをもつ傾向があり、留学生に対しては肯定的な評価のステレオタイプをもつ傾向がある。
- (3) 回答者たちは、中国系、英語圏、韓国系の留学生に対しては、南米系、アフリカ系の留学生に対してよりも、否定的な評価のステレオタイプをもつ傾向がある。接触機会の多い留学生に否定的な評価のステレオタイプをもちやすいと言える。

日本語教授経験の長短との関係では以下のことが見てとれた。

- (4) 日本語教授の経験が長くなると、留学生に対して否定的な評価のステレオタイプをもちやすい。
- (5) それは、接触が少ないと思われる南米系、アフリカ系の留学生に対してではなく、接触の多い中国系、英語圏、韓国系の留学生に対して見られる傾向である。

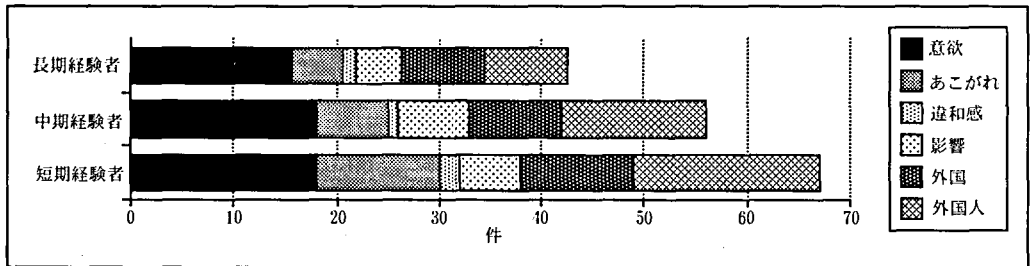


図6. 日本語教授経験者別に見た自己パーソナリティ

- (6) 回答者たちの約7割が、いろいろな背景の人と接することへの意欲をもち、これは日本語教授の経験の長さには影響されず、一定割合が保持されていた。
- (7) 外国人と関わる仕事につきたい、外国で仕事をしたいなどの願望や外国へのあこがれなどは日本語教授経験が長くなると減少する傾向があった。

私たちは、知らない間にカルチャー・ステレオタイプをもち、新しい経験を簡単にそれをを用いて整理してしまいがちである。ただ、それを意識しているかいないかということは、重要な点であろう。ここで調査をした日本語教育に関わる人たちのほとんどは、それに対して意識的であり、できるだけもたないよう、またそれを低減する努力が必要であると考えている。接触の少ない国の留学生には肯定的な評価をし、また経験が浅い間は肯定的な評価をするという傾向がそれを物語っている。接触の多い国の留学生に対してや、多くの経験を重ねていく過程で否定的な評価が増えるのは仕方がないだろう。その点で外国や外国人への素朴なあこがれや熱望は減少していくものの、外国人との接触自体への意欲が減少することなく、保持されていく様子が見てとれたのは、心強い結果であると言わねばならない。それ故にこそ、カルチャー・ステレオタイプを低減するための適切かつ効果的なトレーニングが重要である。

また本調査は、カルチャー・ステレオタイプについての意識を調査したものであり、これと、実際のコミュニケーションの場でどのようにそれが実践されているかということとは、また別のことである。意識調査の結果だけで安心できないのが、カルチャー・ステレオタイプの根の深さである。実際の会話場面でカルチャー・ステレオタイプがどのように利用され、どのように機能していくかについても、同様に明らかにしなければならないが、それは今後の課題である。

付記：本研究は平成13～14年度 文部科学省科研基盤研究(C2)「留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究 —ジャーナルの談話分析—」(課題番号：13680358, 代表者：倉地暁美)の助成を受けて行われた。また、アンケートへの協力者91名の方には、心より感謝する。

【参考文献】

- 今井千景 (2002) 「異文化コミュニケーションと誤解の接点」伊藤雅子監修『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社 46-64.
- 石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1987) 『異文化コミュニケーション』有斐閣
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子 (1998) 『異文化トレーニング』三修社